

研修 C 質疑記録

江東区総務部総務課

蓮 沼 素 子

司会：宮城県内を中心として、市民を含めた縦と横のつながりを平常時から作り、連携を深めたことが、東日本大震災や現在の活動につながっており、以後の資料保全活動でも他の自治体との協力体制を活かしているなど、博物館のない自治体の歴史資料保全活動の事

例と課題についてご提示いただきました。では少しお時間がありますので、ご質問をいくつかお受けしたいと思います。

大場正博（福岡共同公文書館）：デジタル撮影をしているということでしたが、業者へ委託しているのでしょうか、それとも職員が撮影しているのでしょうか、教えてください。

報告者：遠藤家文書の場合は、市の職員が撮影しています。絵図等の大判の資料は、場合によっては業者委託していますが、撮影は基本的に市の職員が行っています。

高村恵美（常陸大宮市文書館）：古文書調査や学生による目録作成をボランティアとして行っているということですが、完全なボランティアとしてお願いしているのでしょうか。

報告者：完全なボランティアではなく、市が受けている補助事業の範囲でお願いしていますので、いくらかお出ししています。ただし、学生さんが向こうからお願いしてきた場合には、完全なボランティアでやっていただいています。

茶谷十六（大仙市総務部総務課）：博物館準備室ということですが、現在の進行状況を展望も含めて教えてほしい。

報告者：今のところお話できる展望はなく、まだ何も決まっていない状態です。準備室のみということです。

中野渡一耕（青森県県民生活文化課）：自治体史が刊行されてから10年以上経って構想が出たということですが、自治体史が出た時に博物館建設構想は出なかったのでしょうか。また、遠藤家文書は自治体史編纂時の調査などでは見つからなかったのでしょうか。

報告者：博物館構想については、昭和30年代前半以降、何度も出ては消え、という状況でした。今回の構想は、白石城建設から10年という節目であったことから市が博物館構想に着手しました。遠藤家文書の存在については、ご当主がごくわずかにの人にしか周知していなかったようです。先代のご当主が重要

な資料であるということで大事に保管しており、家族にも触らせなかったようです。そのため現当主は中身を知らなかったようで、白石古文書の会の方がご当主から見せてもらい、すごい資料だということで市の方へ連絡が来たというのが経緯です。